

P-5 ヒト絨毛膜羊膜炎における羊水中
ラクトフェリンの動態

昭和太

依田 暁, 大槻克文, 藤間芳郎, 清水幸子, 齋藤 裕,
矢内原 巧

[目的]ラクトフェリン(LF)は分子量80,000の鉄結合性糖蛋白であり、顆粒球、乳汁、頸管粘液、羊水などに存在し感染防御機構に関与していると考えられている。羊水中LF測定の結果は少なく、またその生理的意義は未だ不明である。今回羊水中LFとInterleukin-6(IL-6)を測定しさらに卵膜におけるLFの局在を免疫組織化学的に検討した。[方法]早産前期破水症例のうち病理組織にて絨毛膜羊膜炎(CAM)と診断された陽性例(平均29.4週; n=14)と選択的帝王切開例(CAM陰性例、平均36.8週; n=29)を対象に腔内流出時または分娩時に羊水を採取した。羊水LFはサンドイッチELISA法にて測定した。IL-6はHuman IL-6 ELISA Kit (Fuji rebio)を使用し測定した。卵膜におけるLFの染色はSAB法で行った。[成績]羊水LF、IL-6濃度; 羊水LF濃度はCAM陽性例で $9.01 \pm 6.8 \mu\text{g/ml}$, CAM陰性例では $0.88 \pm 0.81 \mu\text{g/ml}$ でありCAM陽性例では有意に($p < 0.0001$)高値であった。羊水中IL-6濃度はCAM陽性例では $8.14 \pm 1.06 \text{ng/ml}$ で陰性例では $0.33 \pm 0.25 \text{ng/ml}$ でありCAM陽性例において有意に($p = 0.0002$)高値であった。また羊水中LFはIL-6と有意の正の相関($r = 0.80$, $p < 0.0001$)を示した。卵膜免疫組織化学的染色; CAM陽性例では顆粒球浸潤を伴い脱落膜から羊膜までLFは強陽性に染色された。[結論]CAM陽性例では羊水中LF濃度が有意に高値であることが初めて示された。今回CAM陽性症例で羊水中LFが上昇し、羊水中LFとIL-6濃度が正の相関を示したことより、LFの子宮内感染に対する防御機構としての生理的意義が示唆された。

P-6 新案腹壁吊り上げ器を用いた腹腔
鏡下骨盤腹膜利用造膈術

神戸大

○船越 徹, 武内享介, 西島光浩, 武木田茂樹,
山中良彦, 本山 寛, 丸尾 猛

[目的]先天性膈欠損症に対する造膈術として従来より種々の手術方法が工夫され、当教室ならびに関連施設では、症例に応じてS状結腸利用法あるいは骨盤腹膜利用法が用いられてきた。当教室では1996年より新案腹壁吊り上げ器を用いた腹腔鏡下手術を導入した。手術の侵襲性、美容性、安全性と有用性を考慮し、新案腹壁吊り上げ器を用いた腹腔鏡下骨盤腹膜利用造膈術を行い良好な成績を得たので報告する。

[方法]新案腹壁吊り上げ器は六甲病院多祢正雄博士が考案された円形の吊り上げ器で、オープンラパロ法で腹腔内に入り腹壁全層吊り上げを行う。手術手技は、(1)先天性膈欠損症に伴う内性器異常の腹腔鏡による診断、(2)膈入口部からの膈トンネルの形成、ダグラス窩腹膜円蓋の遊離、(3)膈入口部からのダグラス窩腹膜の切開および膈入口部粘膜との縫合、(4)腹腔鏡による直腸漿膜、膀胱子宮窩腹膜の縫合による膈断端の形成、(5)プロテーゼの挿入である。

[成績]手術時間は160分以内、術中出血30ml以下であった。吊り上げ法のため、一般手術機器が使用可能であり、ダグラス窩腹膜切開後のCO2漏れを気にする必要はなく、深部持針器を用いた膈断端の形成が比較的容易に行えた。また術中・術後合併症はなく、術後1日目から経口摂取開始、同2日目から歩行開始し、10日目膈の自己管理指導後退院可能であった。[結論]新案腹壁吊り上げ器を用いた腹腔鏡下骨盤腹膜利用造膈術後の外陰・膈の状態は良好で、手術の侵襲性、安全性の面からも推奨されるべき術式と考えられる。過去10年間の当教室ならびに関連施設での膈欠損症計18例に対する治療法の推移を合わせて報告する。